

曉月夜

樋口一葉

青空文庫

だいくわい
第一回

さくらにはな　うめ　か　香とめて柳の枝にさく姿と、聞くばかりも床しきを
 櫻の花に梅が香とめて柳の枝にさく姿と、聞くばかりも床しきを
 こころ　ひと　うはさ　をこころうご　心にくき獨りずみの噂、たつ名みやび男の心を動かして、山の井
 のみづに浮岩るゝ戀もありけり、花　櫻　香山家ときこえしは門
 んへう　あくが　こひ　どうぞくちう　そのひと　表の従三位よむまでもなく、同族中に其人ありと知られて、
 ゆ　みづ　きよ　えどがは　にし　わやう　や　び　きは　行く水のながれ清き江戸川の西べりに、和洋の家づくり美は極め
 ねど、行く人の足を止むる庭木のさまざま、翠　色　したゝる松　すゐしよく　まつ
 にまじりて紅葉のあるお邸と問へば、中の橋のはし板とゞろくば　なか　はし　いた
 かり、扱も人の知るは夫のみならで、一重と呼ぶるゝ令嬢の美　さて　ひと　し　それ　ひとへ　よ　ひめ　びしよ
 色、姉に妹に數多き同胞をこして肩ぬひ揚げの幼なだちよ　あねいもと　かずおほ　はらから　かた　あ　をさ

り、いで若紫ゆく末はと寄する心の人々も多かりしが、
 空しく二八の春もすぎて今歳廿のいたづら臥、何ごとぞ飽くまで
 優しき孝行のこゝろに似す、父君母君が苦勞の種の嫁いり
 の相談かけ給ふごとに、我まゝながら私し一生ひとり住み
 の願ひあり、仰せに背くは罪ふかけれど、是ればかりはと子細も
 なく、千扁一律いやいやを徹して、はては世上に忌はしき
 名を謠はれながら、狭き乙名の氣にもかけず、更けゆく歳を惜し
 みもせず、靜かに月花をたのしんで、態とにあらねど浮世の風
 に近づかねば、慈善會に袖ひかれたき願ひも叶はず、園遊
 會に物いひなれん頼みもなく、いとゞ高嶺の花ごゝろに苦る
 しむ人多しと聞きしが、牛込ちかくに下宿住居する森野敏

とよぶぶんがくしよせい文學書生、いかなる風かぜや誘さそひけん、果はか放たよなき便たよりに令ひ嬢めのうはさ耳みにして、可をか笑やつしき奴わらと笑きつて聞ききしが、その獨ひとりず

 栖みの理由わけ、我われ人ひとともに分わからぬ處ところ何なにゆるゑか探さぐりたく、何なんともし

 て其そのをんな女ひとめ一目見みたし、否いな見たしでは無なく見みてくれん、世よは冠かぶせ

 物の滅めつき金きんをも、秘ひぶつ佛ぶつと唱となへて御みとちやう戸帳との奥おくぶかに信しんを増まさするな

 らひ、朝あさひ日ひかげ玉たまだれの小をす簾との外はちには耻はぢかゞやかしく、娘むすめとも言い

 はれぬ愚ばか物ものなどにて、慈じひ悲ひぶかき親おやの勿もつたい体たいをつけたる拵こしらへ言ことか

 も知しれず、夫それに乘のりて床ゆかしがるは、雪ゆきの後あした朝あしたの末すゑつむ花はなに見けん

 參まゐまへの心こゝろなるべし、扨さても笑せうし止しとけなしながら心こゝろにかゝれば、

 何時いつも門もん前ぜんを通とほる時ときは夫それとなく見みかへりて、見みることも有あれ

 かしと待まちしが、時ときはあるもの飯いひだ田まち町の學がく校かうより歸かへりがけ、

ひくまへ 日暮れ前の川岸づたひを淋しく來れば、うしろより、掛け聲いさ
 ましく駈け抜けし車のぬしは令嬢なりけり、何處の歸りか高髻
 おとなしやかに、白粉にはあるまじき色の白さ、衣類は何か見
 とむる間もなけれど、黒ちりめんの羽織にさらさらとせし高尚き
 すがた 姿、もしやと敏われ知らず馳せ出せば、扱こそ引こむ彼の門内、
 くるま 車の輪の何にふれてか、がたりと音して一ゆり揺れ、ば、するり
 おち 落かゝる後ろざしの金簪を、令嬢は纖手に受けとめ給ふ途端、
 ゆふかぜ 夕風さつと其袂を吹きあぐれば、飜がへる八つ口ひらひら
 も と洩れて散る物ありけり、夫れと知らねば車は其ま、玄關に
 さとむに いそぐを、敏何ものとも知らず遽しく拾ひて、懐中におし入れ
 あと み しま、跡も見ずに歸りぬ。

乗り入れし車は確かに香山家の物なりとは、車夫が被布の縫にも
 知れたり、十七八と見えしは美しくしさの故ならんが、彼の年齢
 の娘ほかに有りとも聞かず、噂さの令嬢は彼れならん彼れなるべ
 し、さらば噂さも嘘にはあらず、嘘どころか聞きしよりは十倍
 も二十倍も美し、さても、其色の尋常を越えなば、土に根生ひ
 のばらの花さへ、絹帽に挟まれたしと願ふならひを、彼の美
 色にて何故ならん、怪しさよと計り敏は燈下に腕を組みしが、
 拾ひきしは白絹の手巾にて、西行が富士の烟りの歌を繕
 ろはねども筆のあと美ごとに書きたり、いよいよ悟めかしき女、
 不思議と思へば不思議さ限りなく、あの愛らしき眼に世の中を何
 と見てか、人じらしの振舞ひ理由は有るべし、我れ夢さら戀など

も厭いやらしき心こころみぢんも無なけれど、此理由このわけこそ知りたけれ、若わかき
 女をんなの定なまらぬ心こころに何物なにものか觸ふる、事ことありて、夫それより起おこりし生なまだ
 道心うしんなどならば、かへすがへす淺あさましき事ことなり、第一だいは不憫ふびんの
 ことなり、中々なか／＼に高尚けだかき心こころを持もちそこねて、魔道まどうに落おち入いるは我われ
 々しよせい書生うへの上うへにもあるを、何なにごとにも一ひと筋すぢなる乙女をとめ氣ぎには無む
 理りならねど、さりとは歎なげかはしき迷まよひなり、兎とも角かくも親したしく逢あひ
 て親したしく語かたりて、諫いさむべきは諫いさめ慰なぐさむべきは慰なぐさめてやりたし、さ
 は言いへど知しりがたきが世よの中なかなれば令嬢ひめにも悪わるき虫むしなどありて、
 其身そのみも行ゆきたたく親おやも遣やりたけれど嫁入よめいりの席せきに落らつく花わの狼藉らうぜきを
 萬も一しと氣きづかへば、娘むすめの耻はぢも我わが耻はぢも流石さすがに子爵ししやくどの宜よく隠かく
 して、一いつしやう生しやうを箱入はこいりらしく暮くらさせんとにや、さすれば此このう

歌は無心に書きたるものにて、半文の價值もあらず、否この優
 美の筆のあとは何としても破廉耻の人にはあらず、必らず深き子
 細ありて尋常ならぬ思ひを振袖に包む人なるべし、扱もゆかし
 や其ぬば玉の夜半の夢。
 はじめは好奇の心に誘はれて、空しき想像をいろいろに描きしが、
 又折もがな今一度みたと願へど、夫よりは如何に行違ひて
 か後ろかげだに見ることあらねば、水を求めて得ぬ時の渴きに同
 じく、一念此處に集まりては今更に紛らはすべき手段もな
 く、朝も晝も燭をとりても、はては學校へ行きても書を開らき
 ても、西行の歌と令嬢の姿と入り亂だれて眼の前を離れぬに、
 敏われながら呆れる計り、天晴れ未來の文學者が此様のこと

にて如何なる物ぞと、叱りつける後より我が心ふらふらと成るに、是非もなし是上はと下宿の世帯一切たゝみて、此家にも學校にも脳病の療養に歸國といひ立て、立いでしまゝ一とつき月ばかりを何處に潜みしか、戀の奴のさても可笑しや、香山家にはをとこの庭男に住み込みしとは。

第二回

敏さとしおさなきより植木うゑぎのあつかひを好きて、小器用こぎように鋏はさみも使へば、竹たけ箒ばきにぎつて庭にはをとこ男なんぐらゐ何なんでもなきこと、但たゞし身の素すじや性を知られじと計り、誠まことに只ただ今の山出やまだしにて、土つちをなめても是れこを立身りつしんの手始めてはじにしたわがき願ねがひと、我われながら宜よくも言いへたる嘘うそにかためて、名前なまへをも其そのとほ通り、當座たうざにこしへらて吾助ごすけとか

言ひけり、さても氣の利かぬとて是れほどの役廻りあるべきや、
 浮世の勤めを一巡終りて、さても猶かゝるべき子の怠惰にて
 もあらば、如來様お出迎ひまで此口つるしても置かれず、草
 むしりに庭掃除ぐらゐはとて、六十男のする仕事ぞかし、勿
 躰なや古事記舊事記を朝夕に開らきて、万葉集に不審紙
 をしたる手を、泥鉢のあつかひに汚がす事と人は知らねど、埒
 もなく万年青の葉あらひ、さては芝生を這つて木の葉を拾ふ姿、
 我ながら見られた体でなく、これを萬一も學友などに見つけられ
 なばと、心笹原をはしりて、門外の用事を兎角に厭へば、
 勝手ばたらきの女子ども可笑しがりて、東京は鬼の住む處で
 もなきを、土地なれねば彼のやうに怕きものかと、美事田舎もの

にしてのけられぬ。

君きみゆゑこそ可あた惜ら青わか年もの一人ひとり、此こゝ處ゝにかく淺あまさしき躰ていたらくと、窓まど

のを小こ篳びを吹ふく風かぜそよとも告つげねば、知しらぬ令ひめ嬢めはおほ方かた部へ屋やに籠こも

りて、琴ことの音ねなどにいよいよ心こゝろを腦なまさせけるが、折をふりしの庭にはあ

るきに微み塵ぢんきずなき美うくつしさを認みめ、我われならぬ召めし使つかひに優やさし

きこと詞ばをかけ給たまふにても情なさふかき程ほどは知しられぬ、最は初じめの想さう像がには子し

細さいらしく珠じゆ數すなどを振ふり袖そでの中なかに引ひきかくし、經きやう文もんの讀どく誦じゆ

に抹まつ香かうくさくなりて、娘むすめらしき匂におひは遠とほかるべしと思おもひしに、

其そのやうの氣けぶりもなく、柳りう髮はついつも高たか島しま田だに結むすひあげて、後おく

れ毛げ一ひと筋すぢえりに亂みださぬ嗜たしみのよさ、さても好このみの斯かくまでに

上じやう手ずなるか、但たゞしは此この人ひとの身みに添そひし果くわ報はうか、銀しろの平かね打ひらうち

一つに鴝ときいろ色いろぶさの根掛ねがけむすびしを、優いうにうつくしく似合にあひ給たまへ
 りと見みれば、束そくはつ髪はつさしの花はな一いちりん輪りんも中々なか／＼に愛あいらしく、此處こゝ一
 つに美人びじんの價値ねうちさだ定さだまるといふ天てんねん然ねんの衣襟えもんつき、襦じゆばん袷えむらさきの襟えむらさきの紫
 なる時ときは顔色いろこと更さらに白しろくみえ、態わざと質素じみなる黒くろちりめんあかいに赤
と糸いとのこぼれ梅うめなど品ひん一いつそう層にそうも二層にそうもよし、あるが中なかにも薄うす色いろ綸
んず子の被布ひふすがたを小波さゝなみの池いけにうつして、緋ひ鯉こひに餌ゑをやる弟おとぎ
み君きみと共に、餘念よねんもなく魅ふをむしりて、自然しぜんの笑ゑみに睦むつましき呬さゝや
きの浦山うらやましさ、敏さとしもとより築山つきやまごしに拜をがむばかりの願ねがひなら
ず、あはれ此このきみ君きみが肺腑はいふに入りて秘密ひみつの鍵かぎを我わが手てにしたく、時を
り機りあれかしと待まつまつ待まちどほ遠とほや、一ひとつき月つきばかりを仇あだに暮くらして近ちかづく
たよ便たよりの無なきこそは道理だうりなれ、令嬢ひめは高嶺たかねの花はなこれは麓ふもとの塵ちり、なれ

ども嵐は平等に吹く物ぞかし。

甚之助とて香山家の次男、すゑなりに咲く花いとゞ大輪にて、

九つなれども權勢一家を凌ぎ、腕白さ限りなく、分別顔の

家扶にさへ手に合はず、佛國に留學の兄上御歸朝までは、

此君にあたる人あるまじと見えけるが、嬢とは隨一の中よしに

て、何ごとにも中姉様と慕ひ寄れば、もとより物やさしき質の、

これは又一段に可愛がりて、物さびしき雨の夜など、燈火の

下に書物を開らき、膝に抱きて畫を見せ、これは何時何時の昔

し何處の國に、甚様のやうな剛き人ありて、其時代の帝に背き

し賊を討ち、大功をなして此畫は引上の處、この馬に乗りし

が大將と説明せば、雀躍して喜び、僕も成長ならば素晴

らしき大將たいしやうに成りな、賊ぞくなどは何なんでもなく討うち、そして此このやう
 に書物ほんに記かかれる人ひとに成りなて、父とう様さまや母かあ様さまに御褒美ごほうびを頂いたぐべ
 しと威張ゐばるに、令嬢ひめは微笑ほゑみながら勇いさましきを賞ほめて、その様やうな
 大將たいしやうに成りな給たまひても、私わたしとは今いまに替かはらず中なかよくして下くだされ
 や、大姉おほねえ様さまも其外そのほかのお人ひとも夫々それに片付かたづて、人ひとの奥おく様さまに
 成り給たまふ身み、私わたしにはお兄にい様さまとお前まへ様さまばかりが頼たよりなれど、
 誰たれよりも私わたしはお前まへ様さまが好すきにて、何卒どうぞいつまでも今いまの通とほり
 御一處ごいつしよに居をりたければ、成長おほくなりてお邸やしきの出来できし時とき、かなら
 ず伴ともなひてお茶ちやの間まの御用ごようにても爲させ給たまへ、お分わかりに成なりしかと
 頼ほずりして言いへば、しだらも無なく抱だかれながら口くちばかりは大人おとなら
 しく、それは僕ぼくが大將たいしやうに成りなて、そしてお邸やしきが出来できさへすれ

ば、其處そこに姉様ねえさまを連れて行ゆきて、いろいろの御馳走ごちそうをなし、い
 ろいろの面おもしろ白しろきことをして遊あそぶべし、大姉様おほねえさまや小姉様ちひねえさまは僕ぼく
すこを少しも可愛かあいがりて呉くれねば、彼あんな奴やつには御馳走ごちそうもせず、門もんを
 しめて内うちへ入いれずに泣なかしてやらん、と言いふを止とめて、其様そのやうな
いち意地おつわるは仰おつしやるな、母様かあさまがお聞きにならば悪わるし、夫それでも
ねえさま姉様ねえさまたちは自分じぶんばかり演藝會えんげいや花見はなみに行ゆきて、中姉様ちうねえさまは
いつ何時いつもお留守居るすゐのみし給たまへば、僕ぼくが我おほきく長ながならば中姉様ちうねえさまばかり
はう方々はう々に連つれて行ゆきて、ぱのらまや何かなにか見みせたきなり、夫それ
いろくは色々いろくの畫ゑが活いきたる様やうに描かきてありて、鐵砲てつぱうや何かなにも本當ほんたう
やうの様やうにて、火事かじの處ところもあり軍いくさの處ところもあり、僕ぼくは大變たいへんに好すきなれ
ねえさまば、姉様ねえさまも御覽ごらんにならば吃度きつとお好すきならん、大姉様おほねえさまは上野うへのの

も淺草あさくさのも方々はう／＼のを幾度いくども見しみに、中姉様ちうねえさまを一度いちども連つ
 て行ゆかぬは意地いぢわるでは無なきか、僕ぼくは夫それか憎にくらしければと、
 思おもふまゝを遠慮ゑんりよもなく言いふ可愛かあいさ、左様さうおもふて下くださるは嬉うれし
 けれど、其様そのやうのこと他人ひとに言いふて給たまはるなよ、芝居しばゐも花見はなみも行ゆ
 かぬのは私わたしの好すきにて、姉様ねえさまたちの御存ごぞんじはなき事ことなり、も
 う此話このはなしは廢よしまするほどに、何なんぞお前様まへさまが今日けふあそびて、
 面おもしろく思おもひしお話はなしがあらば聞きかして下くだされ、今日けふは吾助ごすけがど
 の様やうなお話はなしをいたしました。

この大將たいしやうの若様わかさま難なんなく敏さとしとりこ
 ましきを見るみより、奇貨きくわおくべしと竹馬たけうまの製せい造ざうを手てはじめに、
 植木うゑきの講譯かうしやく、いくさ物語ものがたり、田舎あなかの爺婆ぢいばあは如何いかにかしき

事を言ひて、何處の野山は如何にひろく、某の海には名のつけ様
 もなき大魚ありて、鰭を動かせば波のあがること幾千丈、
 夫れが又鳥に化してと、珍らしきこと怪しきこと取とめなく詰ら
 なきことを、可笑しらしく話して機嫌を取れば、幼な心に十倍
 も百倍も面しろく、吾助々と付きまとひて離れず、我が心
 に面白しと聞けば夫れを其ま、令嬢に語りて、吾助が話しは何
 ごとくも嘘ならぬ顔つき、眞面目らしく取りつぐを聞けば、時
 鳥と鵙の前世は同卿人にて、沓さしと鹽賣なりし、其
 時に沓を買ひて價をやらざりしかば、夫れが借金になりて
 鵙は頭が上がりず、時鳥の來る時分に餌をさがして蛙などを
 道の草にさし、夫れを食はせてお詫をするとか、是れは本當の

本當ほんたうの話はなしにて和歌うたにさへ詠よめば、姉様ねえさまに聞ききても分わかること
 、吾助ごすけが言いひたり、吾助ごすけは大層たいそうな學がくしや者ものにて何なにごとも知しらぬ事こと
 なく、西洋せいやうだの支那しなだの天竺てんじくや何なにかのことも宜よく知しりて、其そ
 のはな話はなしが面白おもしろければ姉様ねえさまにも是非ぜひお聞きかせ申まうしたし、從來まへかたの
 爺ぢいと違ちがひ僕ぼくを可愛かあいがりて姉様ねえさまを賞ほめて、本當ほんたうに好いい奴やつなれば、
 今度こんど僕ぼくの沓くつしたを編あみてたまはる時とき彼あれにも何なにか製こしらへて給たまはれ、
 宜よろしきか姉様ねえさま、屹度きつとぞかし姉様ねえさま、と熱ねつしん心にたのみて、覺おぼつ
 束かなき承しょう諾だくの詞ことばを其その通とほり敏さとに傳つたふれば、此この消息せうそくは人目ひとめ
 の關せきの憚はぶりもなく、玉簾たまだれやすやす越こえて、見みるは邂逅たまたなる令嬢ひめめ
 の便たよりを敏さとし日毎ひごとに手てに取とるばかり、事故よしありげなる心こゝろの底そこも、
 此處こゝにはじめて臙おぼろく々くわかれば、可憐いとほしの念ねんむらむらと堪たへが

たく、君ゆゑにこそ斯くまでに身を盡くす我、木石ならぬ令嬢
 に憎くかるべき筈なし、此荆棘の中すくひ出してと、影も未だ
 なる戀に竹の柱の詫住居を思ひぬ。

第三回

闇を常なる人の親ごゝろ、子故の道に迷はぬは無きものと敏此
 處に眼を止むれば、香山家三人の女子の中、上は氣むづかしく末
 は活潑にて、容貌大底なれども何として彼の君に及ぶ者なく、
 是れにても同胞かと思ふばかりの相違なるに、怪しきは母君
 の仕向にて、流石かるがるしき下々の目に立し分け隔ては無
 けれども、同じ物言ひの何處やら苦がく、愁らかるべしと思ふこ
 と折々に見えけり。

ししやく 子爵の君最愛のおもひ者など、桐壺の更衣めかしき優さ形
 なるが、此奥方の妬みつよさに、可惜花ざかり肺病にでも
 なりて、形見の止めし令嬢ならんには、父君の愛いかばかり深
 かるべきを、いよいよ胸わるく憎くらしく思ひ、然るべき縁にも
 つげず生殺しにして、他處目ばかりは何處までも我儘らしき
 氣随ものに言ひ立て、其長き舌に父君をも巻き込みしか、こ
 の一家に令嬢ありと見て心を盡くす者なく、有るは甚之助殿と
 わばかり不憫しさよ、いざや此心筆に言はして、時機よく
 我れ計なる不憫しさよ、いざや此心筆に言はして、時機よく
 は何處へなりとも暫時伴なひ、其上にての策は又如何様にもあ
 るべく、よし一時は陸奥の名取川、清からぬ名を流しても宜
 し、憚かりの世の中打割りて見れば、天縁我れに有つて此處に

運びはこびしかも知しれず、今いまこそ一いつ寒かん書しよ生せいの名なもなけれど、やがて
 は令ひめ嬢めをも幸かう福ふくの位置ゐちに据すゑて、不ふ名めい譽よの取とり返かへしは譯わけもな
 きことなり、扱さても濱はま千ち鳥どりふみ通かよふ道みちはと夜よもすがら筆ふでを握にぎりし
 が、もとより蓮はす葉はならぬ令ひめ嬢めの、殊ことに我われ庭には男をとこなどに目めの付つ
 く筈はずなければ、最はじめ初めより艶ふみ書しと知しりては、手てに觸ふれ給たまふか否いなか其そ
 處こまことに危あやふし、如いか何かにせんと思し案あんに苦くるみしが、夫それよ、人ひと目め
 にふるゝは何どの道みちおなじこと、何なにも度どき胸ようと半はん紙し四まい五まい枚まい二まいつ折をりに
 して、墨すみつぎ濃こく淡うすく文ふみか有あらぬか書かき紛まぎらはし、態わざと綴とぢて表へ
 紙うしにも字じを書かき、此この趣しゆ向かううまくゆけかしと明あくるを待まちけるが、
 人ひとしらぬこそ是ぜ非ひなけれ、此こ處ゝは隣となりぎかひの藪やぶ際ぎはにて、用ようじ
 心んの爲ためにと茅かや茸ぶきの設まうけに住すまはする庭には男をとこ、扱さても扱さても此この曲くせ

もの
物とは。

ひかげ 日影うらうらと霞みて朝つゆ花びらに重く、風もがな蝴蝶の睡り
 さ 覺ましたきほど、静かなる朝の景色、甚之助子供ごゝろにも浮
 き立ち、何時より早く庭にかけ下りれば、若様、と隙かさず呼
 びて、笑顔をまづ見する庭男に、其まゝ縋りて箒木の手を動
 かせず、吾助お前は畫がかけると突然に問ふ可笑しさ。畫も
 かきまする歌も詠みまする騎射でも打毬でもお好み次第と笑へば、
 それ 夫ならば畫を描きて呉れよ、夕べ姉様と賭をして、これが負け
 れば僕の小刀を取られる約束、夫れは吾助のことからにて、僕
 は吾助に畫が描けると言ひしを、姉様はかけまじと言ひたり、
 ま 負けては口惜しければ姉様が驚ろくほど上手に、後と言はず

に今直いますぐに晝かきて呉くれよ、掃除そうぢなどは爲せずとも宜よしとて箒木はきを奪うばへ
 ば、吾助ごすけ少すこし困こまりて、描かきてはあげますが今いまは少すこし、後のちに吾助
 の部屋へやへお出いでなされ騎馬武者きばむしやをかきて參まゐらせん、夫それとも山水さんすゐ
 の景色けしきにせんかと紛まぎらせば、嫌いや、嫌いや、嫌いや、今いまでなくては何なんでも嫌いや
 なり、後のちになぞと言いはゞ其そのうちに僕ぼくは負まけて、小刀ないふを取とられるか
 ら嫌いや、どうぞ是非ぜひ今直いますぐに描かきて呉くれよ、紙かみや筆ふでは姉様ねえさまのを借かりて
 來くべし、と箒木はきを捨すて、欠かけ出だすに、先まづお待まちなされと遽あわたぐし
 く止め、直すぐと仰おつしやれば是非ぜひなけれど、下へた手に出で來きなば却かへりて
 姉様ねえさまに笑わらはれ、若わかさまの負まけと言いふ物ものなり、斯かうなされ、晝あはゆ
 るゆると後日ごにちの事ことになし、吾助ごすけは晝あよりも歌うたの名めい人じんにて、田舎あなか
 に居をりし時ときは先せん生せいなりし故ゆゑ、其その和歌わかを姉様ねえさまにお目めにかけて驚おどろ

かし給へ、夫こそ必らず若様の勝に成るべしと言へば、早く其
 のうた 歌を詠めとせがむに懐中より彼の綴ぢ文を出し、是れは極大
 いせつ 切の歌にて人に見すべきでは無けれど、若様をお勝たせ申た
 ほか 他の人に内證にて姉様ばかりに御覽に入れ給へ、早く、
 ないしよ 内證で、姉様にお上げなされ、と三つ四つに折りて甚之助
 ふところ の懐中に押入れしが、無心の處何とも氣づかはしく、落さぬや
 ひと くに人に見せぬ様にと呉々をしへ、早くお出でなされと言へば、
 りやうて 兩手に胸を抱きて一心に駈け出す甚之助、お落しなざるな、
 よ と呼びもならず、俄かに心付て四邊を見れば、花に吹く風我
 わら れを笑ふか、人目はなけれど何處までも恐ろしく、庭掃除そこそ
 たびと こに唯人に逢はじと計り、敏これほどの小膽とも思はざりしを。

わが思ふ人ほど耻かしく恐ろしき物はなし、女同志の親しきにも
 此人こそと敬ふ友に、さし向ひては何ごととも言はれず、其
 のひと ひとことふたこと 人の一言一言に、耻かしきは飽くまで耻かしく、恐ろしき
 は飽くまで恐ろしく、塵ほどの事身にしみぬべし、男女の中も
 かゝる物にや、甚之助の吾助を慕ふは夫れとも異なりて淡き物
 なれど、我が好む人の一言重く、文を懐にして令嬢の部屋に來し
 ときは、末の姉君此處にありて、お細工物の最中なるに、今見
 せては悪るかるべしと、情實は素より知る筈なけれど、吾助とも
 言はで遊び居けるが、甚様私しの部屋へもお出なされ、玉突
 して遊びますほどに、と面白げに誘ひて座を立つ姉君、早く去
 ねがしにはたはたと障子を立て、姉様これ、と懐中より

なかみ 半ば見せ、吾助は晝も上手なれど歌の方が猶名人ゆゑ、これを御覽に入れさへすれば、僕が勝つと吾助が言ひたり、勝てば僕の小刀は僕のにて、姉様のごむ人形はお約束束ゆゑ頂くのなり、さあ賜はれと手を重ねれば、令嬢は微笑みながら、嫌、嫌、お約束束は晝なるに歌にては嫌よ、ごむ人形は上げまじと頭をふるに、夫れでも姉様この歌は極大切のにて、人にも見せず落さぬ様に御覽に入れろと吾助の言ひしは、晝よりも良きに相違はなし、是非人形を賜はれとて手渡しするに、何心なく開らきて一二行よむとせしが、物言はず疊みて手文庫に納めれば、其顔を不審げに仰ぎて、姉様人形は下さるか、進げますると僅かに諾く令嬢、甚之助は嬉しく立あがつて、勝つた

勝つた。

第四回

此思ひ通じさへせば、此心安かるべしと願ふは淺し、入立つまゝに欲は増さりて、はてなき物は戀なりとかや、敏はじめの艶書に心をいたためて、萬一落ち散りもせば罪は我れのみならず、知らじとて令嬢も免るされまじ、さらでもの繼母御前如何にたけりて、どの様の事にまで立いたるべきか、思へば我が思慮あさはかにて、甚之助殿に頼みしは萬々の不覺なりし、とも思ひ又自から勵ましては、何の譯もなきこと、大英斷の庭男とさへ成りし我、此上の出來ごと覺悟の前なり、只あやふきは令嬢が心にて、首尾よく文は届きたりとも、つれなく返へされなば

甲斐かひもなきこと、兎角とかくに甚じん之助殿のすけどのの便たより聞ききたしと待まちけるが、
 そのひゆふがたの夕ゆふ方がた彼のか人にんぎやう形がたを持もちて例いつ日ひよりも嬉うれしげに、お前まへの
 歌うたゆゑ首尾しゆびよく我わが勝かちに成なり、此このやう様やうな人にんぎやう形がたを取とりしと誇ほこり
 顔かほに來きて見みすれば、姉ねえさま様さまは彼のあ歌うたを御覽ごらんなされしや、して何なんと
 おつ仰おつしやりしと問とへば、何なんとも言いはずに文庫ぶんこに入いれお仕舞しまひなされし
 が、今度こんども又またあの様やうな歌うたを詠よみて、姉ねえさま様さまの御覽ごらんに入いれよかし、
 お前まへが褒ほめられなば我われとても嬉うれしき物ものをと可愛かあゆく言いふに、思おもひ
 ある身み一いつ層いっそうたのもしく様さま々／＼に機嫌きげんを取とりて、姉ねえさま様さまも定さだめ
 し和歌うたはお上じやうず手てならん、是非ぜひ吾助ごすけも拜はい見けんが仕したければ、此このご
 頃ころに姉ねえさま様さまにお願ねがひなされ、お書かき捨すてを頂いたぎて給たまはれ、必かなら
 ず、屹度きつとと返事へんじの通路つうろを此處こゝにをしへ、一いち日にちを待まち二日ふつかを待まち、

みつか
三日に成りても音沙汰の無きに敏こゝろ悶え、甚之助を見るご
とに夫れとなく促がせば、僕も貰つて遣りたけれど姉様が下さ
らねばと、哀れ板ばさみに成りて困り入りし体、子心にも義理
に引かれてか中に立ちて胡亂胡亂するを、敏いろくに頼みて此
のたび、かうぶみ
度は封じ文に、あらん限りの言葉を如何に書きけん、文章
の艶麗は評判の男なりしが。

見る目に見なば美男とも言ふべきにや、鼻筋とほり眼もと鈍か
らず、豊頬の柔和顔なる敏、流石に學問のつけたる品位
は、庭男に成りても身を放れず、吾助吾助と勝手元に姦ま
しき評判は、お茶の間を越して大奥にも高く、お約束束の
聳君洋行中にて、寢覺を寫眞に物がたる總領の令嬢さ

へ、垣根かきねの櫻折さくらをれかし吾助ごすけ、いさゝかの用事ようじにて大層たいそうらしく、
 ごほうびごほうびに賜たまはる菓子くわしの花紅葉はなもみぢ、お手づてからなる名譽めいよはあれど、
 御褒美ごほうびに賜たまはる菓子くわしの花紅葉はなもみぢ、お手づてからなる名譽めいよはあれど、
 戀こひに本尊ほんぞんあれば傍わきだちに觸ふれる眼めなく、一心しんおもひ込みては有あり
 昔むかしの敏さとし、可憐あたら廿四にんきやうの勉べん強きやうざかりを此このてい体たいたらく殘ざ
 念ねんとも思おもはねばこそ、甚じん之助のすけに追つゐ従しやうしあるきて、本心ほんしん
 には成なるまじき文ふみの趣向しゆかう、案外あんぐわいのことにて拍子へうしよく行き、
 文庫ぶんこに納め給たまひしとは最もう我がもの、と一度たびは勇いさみけるが、夫それよ
 り後のちの幾度いくど幾いくつう通とおかき送りし文ふみに一度たびの返事へんじもなく、さりとして無な
 情なげは投なげかへしもせねど、披ひらきて讀よみしや否いなや甚じん之助すけが答こたへぶ
 りの果敢はかなさに、此度このたびこそと書かきたるは、長さ尋ながひろにあまり思おもひ筆ふで
 にあふれて、我われながら斯かくまでも迷まよふ物ものかと、文ふみを投なげ出して嘆た

んそく
 息しけるが、甚之助に向ひては猶さら悲しげに、姉様はあく
 まで吾助を憎くみて、あれほど御覽に入れし歌に一度のお返歌も
 なく、あまつさへ貴君にまで、この様の取次するなとさへ仰し
 やりし無情さ、これ程の耻を見て我れ男の身の、をめをめお邸に
 を居られねば、暇を賜はりて歸國すべけれど、聞き給へ我れ田舎に
 は兩親もなく、只一人ありし妹の我れと非常に中よかりし
 が、今は亡せて何もなき身、その妹が姉様に正寫にて、今も
 在世ばと戀しさ堪へがたく、お前様に姉様なれば我れには妹
 の様に思はれて、其お書き捨ての反古にても身に添へて持たば本
 望なるべく、切めて一筆の拜見が願ひたきなり、されども斯
 く下賤の我れ、いか様に思ふとも及びなき事にて、無禮ものとお

叱しかりを受うければ夫それまで、なれどもお厭いやならばお厭いやにて、寧むしろ、斷さつ然り、目め通どりも厭いややなれば疾とく此こ處こを去いねかし、とでも發あり言りて、
 いよく成なるまじき事ことと知しらば其その上うへ覺かく悟ごもあり、斯かくまでの
 おもなん思おもひ何なんとしても消きゆる筈はずなけれど、覺かく悟ご次第しだいに斷あきら念めもつくべし、
 今いま一度ど此文これを進あげて、明あらかのお答こたへ聞きいて給たまはれ、夫それ次第しだいに
 て若わか様さまにもお別わかれに成なるべければと虚き實じつをまぜて、子こ心ごころに
 哀あはれと聞きくやう頼たのみければ、甚じん之すけ助すけもとより吾ご助すけ負びにいて、此この
 とこ男とこのこと一いも十じゅうも成じやう就じゆさせたく、喜よろこぶ顔かほ見みたさの一心しんに、
 これまでの文ふみの幾いく通つうも人ひと目めに觸ふれぬ様やうとゞこほり無なく届とどけ、令ひ
 嬢めの心こころも知しらず返へん事じをと責せめしが、此この迫せまりたる詞ことばに我われまづ悲かなし
 く、今け日ふこそは必かならず返へん事じを取り、其そ方ちの喜よろこぶ様やうにすれば、田あな舎か

へ行くことは廢めになし、何時までも此處に居て呉れよ、突然に
 田舎へ行きては嫌やぞと泣き、其涙を敏に拭はれて猶かなし
 く、手にすがりて何時までも泣きしが、三歳子の魂いつはりには
 有らで、此こと心根にしみて悲しければこそ、其夜閑燈のもの
 とに令嬢を拜がみて、吾助は斯く思ひて斯く言ふを、後生、姉
 さまへんじ
 様返事を賜はれ、決して此後我まも言はず惡戯もなすま
 じければ、吾助の田舎へ歸らぬやう、今まで通り一處に遊ばれる
 やう返事を賜はれ、只一寸で宜し吾助は一筆にてもと言ひた
 れば、此巻紙へ何か書て僕に賜はれ、吾助は田舎へ歸りても行
 く處の無き身なれば、大方は乞食に成るべきにや、夫れでは僕
 どうしても嫌やなり、是非此文を御覽なされて、一寸何とか言

くだ
 ふて下され、よう姉様、よう姉様、お願い、此拜、とて紅葉
 の手を合はす可憐しき、情ふかき女、性の身の、此事のみにて
 なみだ あたひ
 も涙の價値はたしかなるに、よし山賤にせよ庭 男にせよ、
 われを戀ふ人世に憎くかるべきか、令嬢の情緒いかに纏れけん、
 甚之助母 君のもとに呼ばれ、此返事を聞く間なく、残り惜し
 げに 出 行 行 たるあとにて、玉の腕に此文を抱き、胸に當て、夜も
 すがら泣きけり。

第五回

はたち はる ゆめ
 二十の春を夢と暮らして、落花の夕べに何ごとを思ひつきてか、
 ひめ べつさうずまゐ
 令嬢は別荘住居したき願ひ、鎌倉の何處とやらに、眺望を
 えら こそぞか
 撰んで去年買はれしが、話しのみにて未だ見ぬも床かしく、別亭

の洒落たるが有りて、名物の松がありてと父君の自慢にすが
 り、私し年來我が儘に暮して、此上のお願ひは申がたけれど、
 とてもの世を其處に送らしては給はらぬか、甚之助様成長なら
 ば、遣はさるべきお約束とや、夫までのお留守居、又は父様
 を折ふしのお出遊に、人任せ成らずは御不自由も少なかるべく、
 何卒其處に住まはせて、世を白波に浦風おもしろく、梅の
 花貝でも拾はせて給はれとの願ひ、不憫や如何様な子細あれば
 とて、月花をかしき盛りの歳に、千人萬人すぐれし美色
 を、鏡は無きか知らぬかの様な身の上、他人ごとにして嬉しとは
 聞かれぬを、親といふ名のまして如何ならん、さりとは隠居様
 じみし願ひも、令嬢が心には無理ならぬこと、生中都に置きて

同胞どもが、浮世めかすを見するも愁らし、何ごとも望みに
 任かせて、住みたしとならば彼地に住ませ、好きな琴でも松風
 に弾き合はし、氣儘に暮させるが切めてもと、父君此處にお許
 るしの出でければ、あまりとても可愛想のこと、よし其身の願
 ひとて彼の様な遠くに、路は夫れほどで無けれど行き限りにては
 我れも心配なり子供たちも淋しかるべく、甚之助は其うちに
 も慕ひて、中姉様ならでは夜の明けぬに、朝夕の駄々いかに
 増さりて、姉たちの難義が見ゆる様なれば、今しばらく止まりて
 と、母君は物やはらかに日ひたれど、お許しの出しに甲斐なく、
 夫々に支度して老實の侍女を撰らみ、出立は何日々と
 内々に取り取きめけるを、甚之助かぎりなく口惜しがり、先づ父

君に歎き母君を責め、長幼の令嬢に當りあるきて、中姉様
 を窘め出すこと、恨らみ、僕をも一處にやれと迫まり、令嬢に對
 へば譯もなく甘へて、取りつきしまゝ泣きて離れず、姉様何ご
 とを腹たちて鎌倉なぞへお出なさるぞ、夫れも一月や半月な
 らば宜けれど、お歸邸は何時とも知れずと衆人が言ひたり、どの
 様に仰しやる共それは嘘にて、鎌倉へ行かばお歸りの無きに極
 まりたれば、残りて淋しからんより我れも一處にゆき、我れも此
 邸に歸るまじ、父様も嫌や母様も嫌や、誰れを捨て、も諸
 共に行かんと計り、令嬢は靜かに諭して、其身もほろりとし、
 可愛き事いふて泣かし給ふな、鎌倉へ行きて歸らぬとは誰れが
 言ひしか、夫こそは嘘にて、遂ひ一寸あそびに行き、其うちに

歸かへつて來きまする程ほどに、おとなしう待まちて給たまはれ、よし歸かへらずとて
 彼あしこ地まへさまはお前まへさま様やしきのお邸おほきうゆゑ、成おほきう長たまなり給たまふまでのお留るすゐ守いま居いま、今いまも
 お連つれ申まうしたけれど夫それこそ淋さびしく、直すぐ嫌いやに成なりて母かあさま様こひしこひし
 かるべし、何なにも柔おとな順おほきうしう成おほきう長たまなり給たまへと、詫わびるやうに慰なぐさめられて、
それ夫それでもと腕わんぱく白いも言いへず、しくしく泣なきに平つね常げんきの元げんき氣ななくなりて、
 悄しよんぼり然すとせし姿すがた可あぢら憐しし。
 令ひめ嬢かまくらが鎌かまくら倉うはさごもりの噂うはさ、聞きく胸むねとゞろきて敏さとししはは呆あきれしが、
なほじん之の助すけに委くはしく問とへば、相さうあ違ひなき物ものがたり語な半なは泣なきながらに
なにとぞて、何な卒やうお廢なめに成なる様やうな工くふう風なは無なきかと頼たのまれて、扱さても何なにとせ
く組うでむ腕しあんの思あた案あにも能あはず、凋しほれかへる甚じん之の助すけが人ひと目めに遠ゑんり
よ慮うらなきを浦うらやみて、心こゝろ空らになれど土つちを掃はく身みに箒は木の面めん倒たうさ、

このみに成りしも誰れ故かは、つれなき令嬢が振舞其理由も探ぐれ
 ず、此處に捨てられて取のこされん我、いでや出立前の一目
 をと心に願ひしが、空しく影も見ずに明日の早朝と恨めしき便
 り、今は何も捨て、一日病氣と伏しけるが、戀に亂る、心あは
 れ悲しくも、令嬢が部屋の戸一枚を隔てに、今宵かぎりの名残を
 惜しまんとて、心も空も宵闇の春の夜、落花の庭に踏む足の音
 なきこそよけれ、切めては夢に入れかすと忍びぬ。
 更けて軒ばに風鈴のおと淋しや、明日は此音いかに戀しく、
 此軒ばのこと部屋のこと、取分けては甚様のこと、父君の
 こと母君のこと、平常は左までならぬ姉妹のこと、戀しかるべ
 き物をと今も戀しく、寐ぬ夜の床に物おもふ令嬢、甚之助の暫

ばしかたはら
 時も傍はなれず、今宵も此處に寝ると言ひしを、明日の朝の邪魔
 なればと母君遠慮して、連れ行かれしあとの猶さら淋しく、
 思へば明日よりの閑居いかならん、甚様はしばしこそ我れを
 慕ひて泣きもし給はめ、程へなば自づと忘れて、姉様たちに馴
 れ給はんは必定、我れは紛ぎるゝこと無き身の戀しさ日毎に
 増さりて、彼の笑顔みたしとても及ぶ事にあらず、父君とても
 左なりかし、遠く離れて面影をしのばゝ、近きには十倍まして、
 深かりし慈愛の聲この耳を離れざるべし、是れによりてこそ此處
 をも捨て、いとゞしき思ひに身を苦るしむれど、吾助のことも忘
 れがたし、免るせよ吾助、夢さらさら憎くからねばこそ、戀すま
 じとて退く身ぞかし、うつせみの世に斯かる身の例し又ありや、

知らぬ心こころに恨うらみもせん憎にくみもせん、其憎そのにくくまるゝを本望ほんまうにて
 の處しよゐ爲もら、貫ふみひし文ふみは何處どこまでも惜をしきに、封ふうこそ切きらぬ手文庫てぶんこに
 秘ひめて、一生しやうきはの際きはまでは友ともとせん心こころ、さりとは我われ生おひさ先のあ
 る身み、憂うきに月日つきひの長ながからん事こと愁つらや、何事なにごともさらさらと捨すて
 、憂うからず面おも白しろからず暮くらしたき願ねがひなるに、春風はるかぜふけば花はな
 めかしき、枯木かれきならぬ心こころのくるしきよ、哀あはれ月つきは無なきか此胸このむねは
 るけたきにと、押おす手てにいよいよ動悸どうきたかく、嚙かみしめる袖そでに涙なみだ
 こぼれて、令嬢ひめは暫時しばらくうち伏ふして泣なきけるが、吹入ふきいる夜風よかぜたが魂たましひ
 か、あくがる、心此處こゝろに堪たへがたく、靜しづかに立たつて妻戸つまどを押おせば、
 今いまぞ廿日はつかの月面つきおもかげ霞かすんで、さし昇のぼる庭にはに木立こたちおぼろおぼろと暗くら
 く、似にたりや孤徽殿こきでんの細殿ほそどのぐち口さとしため、敏としが爲ためには若しくものもなき時ときぞ

かし。

第六回

言はぬ浮世の様々には如何なることや潜むらん、今は昔の
 涙の種、我が戀ならぬ懺悔物がたり、聞くも悲しき身の上あり、
 春の夜ふけて身にしむ風に、寢屋の燈火また、く影もあはれ淋し
 や丁字頭の、花と呼ばれし香山家の姫、今の子爵と同じ腹
 に、双玉の稱へは美色に勝を占めしが、さりとして兄君に
 席を越えず、物靜かにつゝましく諸藝名譽のあるが中に、琴
 のほまれは久方の空にも響きて、月の前に柱を直す時雲はれて
 影そでに落ち、花に向つて玉音を弄べば鶯ねを止めて節をや
 學びけん、子爵の寵愛子よりも深く、兩親なき妹の大切

さ限りなければ、良きが上にも良きを撰らみて、何某家の奥
 方とも未だ名をつけぬ十六の春風、無惨や玉簾ふき通して此
 初櫻ちりかゝりし袖、馬廻りに美男の聞えは有れど、月の
 雲井に塵の身の六三、何として此戀なり立けん、夢ばかりなる
 契り兄君の眼にかゝりて、或る日遠乗の歸路、野末の茶
 店に女を拂ひて、因果を含めし情の詞さても六三露顯の曉は、
 頸さし延べて合掌の覺悟なりしを、物やはらかに若かも御
 主君が、手を下げるぞ六三邸を立退いて呉れ、我れも飽まで可
 愛き其方に、遣はさるべくは遣はしたけれど、七萬石の先祖が
 勳功に對し、皇室の藩屏といふ名に對し、此こと許はな
 し難きに表立ちは姫も邸に置がたけれど、我れには一人の妹、

ことにりやうしん兩親らうご老後の子にて、形見と思へばかたみ おも不憫ふびんさ限りのなきに、
そちこころ其方が心一つにて我れもあんどひめ安堵姫きずに疵もつかず、此處こゝをよく了簡れうけん
さつぱりなし斷念のいと退て呉れかし、さりながら此後こののちの身の有ありつきにと包
みもの物たまを賜はりて、言はねど手切れの、端金はしたにはあらざりけんを、
ろくさこれ六三此金めとに眼も止めず、重々ぢゆううくの大罪だいがいくび頸おふと仰せらるゝとも恨
ならみは無きを、情なさけのお詞身ことばみに徹しぬとて男一匹をとこいつびき美事みごとなきしが、
げせんさても下賤ねもに根を持てば、戀こひを金かねゆゑするとや思す、是これより以後
いつしやうの一ねんひめさま生五十年姫様ゆびには指もさすまじく、況まして口外こうぐわい夢ゆめさ
いたら致すまじけれど、金かねゆゑ閉ぢる口くちには非あらず、此金こればかりはと恐おそ
つぎれげもなく、突もどして扱さてつくづくと詫わびけるが、歸邸きていその儘まの
いとまごひ暇い乞まごひ、惜をしき名殘なごりを姫ひめとも言いはず、生うまれかはらば華族くわぞくにと

計り、此處を出で、何處へ行けん、忘れぬ姫のこと忘れねばこそ、
 義理といふ字に涙を呑んで、心は邸を離れざりしが、帳臺ふ
 かくに物おもふ姫、六三暇を傳へ聞くより、心むすぼほれて解く
 ること無く、扱も慈愛ふかき兄君が罪とも言はでさし置給ふ
 もつたい、身は七万石の末に生れて親は玉とも愛給ひしに、
 瓦におとる淫奔耻かしく、猶其人の戀しきも愁らく、涙に沈
 んで送る月日に、知らざりしこそ幼なけれ、憂き身の上に憂きを
 重ねて、宿りし胤の五月とは、扱もと計り身を投ふして泣けるが、
 今は人にも逢はじ物も思はじ、唯死ねかしと身を捨ものにして、
 部屋より外に足も出さず、一心悔み初めては何方に訴ふべき、
 先祖の耻辱家系の汚れ、兄君に面目なく人目はずかしく、

わがこゝろ 我 心 我れを責めて夜も寐ず晝も寐ず、一身つかれて瘦せに
 やすがた 見 あにきみこゝろ 瘦せし姿、見る兄君の心やみに成りて、醫藥の手當に手づからの
 ほんそう 奔走 いよいよ悲しく、果は物言はず泣のみ成りしが、八月の壽
 ゆみやうこのこ 命 此子にあれば、月足らずの、聲いさましく揚げて、玉の姫
 つきた 様 御出生と聞きも敢へず、散るや櫻の我が名空しく成ぬるを、
 き 何處に知りてか六三天地に哭きて、姫が命は我れ故と計、短かき
 ろくさてんち なげ 契りに淺ましき宿世を思へば、一人残りて我れ何とせん、待
 あさ しゆくせ おも ひとりのこ 給へ諸共にの心なりけん、見し忍び寐に賜はりし姫がしごき
 こゝろ み しのね たま ひめ 給へ諸共にの心なりけん、見し忍び寐に賜はりし姫がしごき
 さいご むね いくへ おほかわ なみ 大川の波かへらずぞ成
 ひぢりめん の 緋縮緬を、最期の胸に幾重まきて、
 ふかう もと さと そ 不幸の由來に悟り初めて、父戀し母戀しの夜半の夢にも、咲かぬ

さくらかぜ うら
 櫻に風は恨まぬ獨りずみの願ひ固くなり、包むに洩ぬ身の素性、
 ひと
 人しらねばこそ様々、の傳手を求めて、香山の令嬢と立つ名く
 るしく、一切衆生すて物に、我まゝらしき境界こゝろ
 には涙を呑みて、憂しや廿歳のいたづら臥、一念かたまりて動か
 ざりけるが、岩をも徹す情の矢の根に敏がごと身にしみ初て、其
 のひとゆか
 人床しからねど其心にくからず、文を抱きて幾夜わびしが、
 わ
 我れながら弱き心の淺ましきに呆れ、見ればこそは聞けばこそは
 おも
 思ひも増すなれ、いざ鎌倉に身を退がれて此人のことをも忘
 れ、世に引かるゝ心も斷ちたきものと、決心此處に成りし今宵、
 せ
 切めては妻戸ごしのお聲きゝたく、見とがめられん罪も忘れて此
 處に斯く忍ぶ身と袖にすがりて敏なげゝば、これを拂ふ勇氣今は

な 無く、よし人目には戀とも見よ我が心狂はねばと燈下に對坐て、
 な 成るまじき戀に思ひを聞く苦るしき、敏はじめよりの一念を語り、
 せ 切めてはあはれと曰へと恨むに、勿体なきことゝて令嬢も泣き、
 こゝろぎ ふみふう き お志しの文封は切らねど御覽ぜよ此通りと、手文庫に誠を見せ
 しが、扱も我故と聞けば嬉しきか悲しきか、行末いかに御立
 身なされて如何様なお人物に成り給ふお身にや、思へば尊とき
 ごべんきやう 御勉強ざかりを我れなどの爲にとは何事ぞや、いよいよ戀は
 あさ 淺ましきもの果敢なきもの憎くきもの、我が生涯の此様に
 かな 悲しく、人に言はれぬ物を思ふも、淺ましき戀ゆゑぞかし、我れ
 あ には有らぬ親の昔し、語るまじき事と我れも秘め、父君は更な
 はゝぎみ 母君にも家の耻とて世に包むを、聞かせ參らするではなけれ

ど、一生しやうに一度どの打明うちあけ物がたり、聞きて給たまはれ憂うき身の素す性じやうと、
 此處こゝに涙なみだを盡つくして語かたり明あかせば、夢ゆめとや言いはん春はるの夜よあげ方がたちか
 く、鳥とりがね空そらに聞きこえて扱さても忙せはしなし、君きみは都みやこに我われは鎌倉かまくらに、
 引ひきはなれて又またいつか逢あふべき、定離ぢやうりの例ためしを此處こゝに見みれば、
 戀こひは一人ひとりぞ安やすかりける、何事なにごとも言いはじ思おもはじ、仰おふせられても給たま
 はるなどて、曉あかつきの月つきに影かげを別わかちしが、これより姫ひめは如何いかに成なりけ
 ん、扱さても敏としは如何いかに成なりけん、つれなく見みえし有明ありあけの月つきの形かた見
 を空そらに眺ながめて、(曉あかつきばかり)と※うめきけんか知しらず。

青空文庫情報

底本：「都の花 第百一號」金港堂

1893（明治26）年2月19日

初出：「都の花 第百一號」金港堂

1893（明治26）年2月19日

※初出時の署名は、「一葉女史」です。

※表題は底本では、「曉月夜《あけつきよ》」となっています。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「文《ふみ》」「文《ぶみ》」「此文《これ》」に使用されている「文」は「首尾《しゆび》よく文《ふみ》は」を除きくずし

字的な文字を使用していますが、通常の「文」で入力しました。

※「ゞ」と「ヅ」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2013年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

暁月夜

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>